

St. Luke's International University Repository

Evaluation of the Revised Curriculum by Three Graduating Classes (1999-2001)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 道子, 森, 明子, 久代, 和加子, 桃井, 雅子, 片桐, 和子, 堀内, 成子, 園城寺, 康子, 菊田, 文夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/417

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



報 告

卒業時の学生によるカリキュラム評価の推移

— 1995～1997年度入学生 —

(カリキュラム評価第3ワークグループ)

小澤 道子¹⁾ 森 明子²⁾ 久代和加子³⁾ 桃井 雅子²⁾
 片桐 和子⁴⁾ 堀内 成子²⁾ 園城寺康子⁵⁾ 菊田 文夫⁶⁾

Evaluation of the Revised Curriculum by Three Graduating Classes (1999–2001)

Michiko OZAWA, R.N.¹⁾, Akiko MORI, R.N., M.N.²⁾,
 Wakako KUSHIRO, R.N.³⁾, Masako MOMOI, R.N., D.N.Sc.²⁾,
 Kazuko KATAGIRI, R.N., M.N.⁴⁾, Shigeko HORIUCHI, R.N., D.N.Sc.²⁾,
 Yasuko ONJOJI, M.A.⁵⁾, Fumio KIKUTA, M.Ed.⁶⁾

〔Abstract〕

In 1995 a revised curriculum was implemented at St. Luke's College of Nursing, beginning with first year students. Changed aspects included promoting self-learning ability and integrated learning, and sequencing of curriculum subjects. Evaluations were obtained from students from the first three classes to experience the new curriculum. An evaluation questionnaire was given and collected on the day before graduation day. Students responded to questions about the relation between a senior-level course called "Integrated Nursing · Nursing Research II" and the already completed subjects, the sequencing of subjects in the curriculum, satisfaction level and evaluation of classes, educational system and educational support.

Four major findings were identified. ① That students identified the relevance of many courses for "Integrated Nursing · Nursing Research II" was interpreted as confirming the integrity of the curriculum. ② The revised curriculum put general educational subjects in the first year in light of their importance as a foundation for nursing but evaluations from students indicated that they hoped for nursing subjects from the first year. The problem found was how to sequence nursing and other educational subjects. ③ Students from all three classes reported high satisfaction with "Integrated Nursing · Nurs

-
- 1) 聖路加看護大学 基礎看護学 St. Luke's College of Nursing, Fundamentals of Nursing
 2) 聖路加看護大学 母性看護学 St. Luke's College of Nursing, Maternal & Midwifery Nursing
 3) 聖路加看護大学 老人看護学 St. Luke's College of Nursing, Gerontological Nursing
 4) 聖路加看護大学 成人看護学 St. Luke's College of Nursing, Adult Nursing
 5) 聖路加看護大学 英語 St. Luke's College of Nursing, English
 6) 聖路加看護大学 情報科学 St. Luke's College of Nursing, Information Science

ing Research II”, “nursing subjects group” and “clinical nursing subjects group”, and in that order for each class. The average for all three years ranged from “considerably satisfied” to “neutral”. Ninety percent of students highly evaluated “what they experienced in this college”. ④ Classes were affirmatively received. Negative answers for “informatics subjects” increased for each graduating class. This might be an urgent problem to be dealt with by both investing capital for speedy information technology and improving maintenance and management of the information system.

On the basis of evaluations from three graduating classes, the integrity and subject-sequence of the revised curriculum is judged satisfactory, even though some annual differences were seen. Moreover, the importance of this kind of evaluation for implementing a more effective curriculum was reaffirmed.

[Key words] baccalaureate curriculum, students' evaluation

[キーワード] 学部カリキュラム, 学生評価

[抄 録]

本学は1995年度入学生より、改訂カリキュラムを採用した。改訂カリキュラムの特徴として、自学自習能力の育成、統合化学習の推進、科目配置の順序性があげられる。

本報告は、改訂カリキュラム導入期の3年間における卒業時点での学生側から見たカリキュラムの満足度と教科カリキュラムの順序性、統合性に対する評価の推移を知ることを目的とした。

調査方法は、調査日を卒業式前日とし、質問紙を配布しその場で回収をした。質問紙の構成は、教科カリキュラムの統合性を知るために「総合看護・看護研究Ⅱ」と履修した科目との関連、教科目の順序性、カリキュラムの満足度、授業や教育システム、教育支援に対する評価などである。

その結果は、次の如くである。

①『総合看護・看護研究Ⅱ』（いわゆる卒業論文）にこれまで履修した教養科目・基礎科目・専門科目の、各科目の関連のあるものを科目の出現率で検討すると、3年間とも基礎科目と専門科目の出現率が高く、教科カリキュラムの統合性が支持されていると解釈できる。

②改訂カリキュラムでは、看護への高い志向をもつ学生に、あえて1年次では、教養科目に力を入れる科目配置にした。しかし3年間とも学生は、入学次から看護学の科目を求めている。入学年次に教養科目と看護学の科目をどのように配置していくのが課題として残された。

③カリキュラム全体に対する満足度は、3年間ともその高い順に「総合看護・看護研究Ⅱ」、「専門科目群」、「実習科目群」であり、全体の平均は、5段階の4：「やや満足」から3：「どちらでもない」の間に分布した。

④カリキュラム運用に関しては、「専門的知識が身につく」「自分の視野を広げるのに役立つ授業が多い」等が3年間ともに肯定的回答が高く、また、「本学の学生として経験したことは肯定的にとらえている」とした学生は、9割以上を占めていた。一方、「情報処理関係の教育が充実している」には、否定的回答が年次毎に徐々に増加していた。今後とも加速的に変化する情報技術革命に対する設備投資という大きな側面と、日常的な維持管理への対応の側面の両面からの取り組みが急務な課題であろう。

以上、カリキュラムの受け手である学生側の3年間の評価は、一部に年次差が見られたが、総

じて、カリキュラムの統合性と順序性が受け入れられ、満足できるものとして示された。そして、より実効あるカリキュラムのためには、このような評価活動の重要性が再認識された。

I. はじめに

本学は1995年度入学生より、改訂カリキュラムを採用した¹⁾。10年以上の討議を経て作られた改訂カリキュラムの特徴は、学生の自学自習能力の育成を基本に、カリキュラム全体が統合化学習を推進するもので、科目配置の流れである順序性が重視された。

改訂カリキュラムを運用する教員にとっては、よりよいカリキュラムを目指す課題が絶えず問われ、1997年には、カリキュラム評価委員会が設置され、全学的にカリキュラム評価活動を行っている²⁾。

私共のカリキュラム評価第3ワーキンググループは、カリキュラムの受け手である学習者に焦点をあて、学習者(学生)が卒業直前に4年間を振り返った時のカリキュラムに対する満足度と教科カリキュラムの順序性、統合性に対する評価を中心に調査を行ってきた。なお、調査においては、総合看護・看護研究Ⅱを教科カリキュラムの統合的学習の指標とした。また、「カリキュラム」という言葉に、教科目・学習資源・行事・課外活動など大学が教育として意図しているものを含めることにした。

第1回調査は、改訂カリキュラムで4年間学習した1995年度入学生に実施し、その結果はすでに報告した³⁾。

本報告は、第1回調査と同一項目の調査を3年間実施した調査結果である。すなわち、改訂カリキュラムを導入した初期の3年間の卒業時点での学生側から見たカリキュラムの満足度と教科カリキュラムの順序性、統合性に対する評価の推移を類似性と差異を含み明らかにすることを目的とした。このことは、よりよい実効カリキュラムのあり方に資するものでもあ

る。

II. 方法

対象は、1995年～1997年度に入学し改訂カリキュラムで学習した学生221人である。なお本学では、クラスの呼び名を1995年度の入学生は、クラス1999年の如く卒業年次で表示している。したがって本報告ではカリキュラム導入期の3年間の年次を1999年・2000年・2001年と卒業年次で示す。

調査方法は、調査日を4年生全員が集まる卒業式前日の日とし、質問紙を教室内で配布しその場で回収をした。回収率は、1999年91.2% (52/57)・2000年71.4% (55/77)・2001年72.4% (63/87)である(表1)。

質問紙の内容は、教科カリキュラムの統合性を知るために「総合看護・看護研究Ⅱ」と履修した科目との関連、教科目の順序性、カリキュラムの満足の度合とその理由、授業や教育システムに対する評価(ベネッセ文教総研(1997)より10項目)⁴⁾、教育支援に対する評価(Fairfield大学の学生満足度質問紙を参考)⁵⁾などである。

III. 本学カリキュラムの概要

本学の理念の中に、看護を「人間の健康に焦点を当て、人間と健康に働きかけ、各人の到達する身体的側面と、心理・社会・霊的側面の最高位、すなわち最適健康状態を生み出すように援助する

表1 第1回から第3回調査

調査回数	対 象	方 法	回収率
第1回	Class of 1999 学部生57名	卒業式前日に同一 内容の質問紙法	91.2%
第2回	Class of 2000 学部生65名 学士編入1回生12名		71.4%
第3回	Class of 2001 学部生72名 学士編入2回生15名		72.4%

働き」と定義している。そして、看護学の主要概念を「人間」・「健康」・「環境」・「看護」の4つの概念とした。図1は、4つの主要概念間の関係性と、教科カリキュラムの構成である教養科目・基礎科目・専門科目とそれらの各科目の年次配置を示したものである。

IV. 結果と考察

1. 教科カリキュラムの統合性への評価

本調査では、教科カリキュラムの統合性の指標として、最終学年である4年後期に「看護を系統的に探求する科目」である『総合看護・看護研究Ⅱ』（いわゆる卒業論文に当たる）とした。そして、この『総合看護・看護研究Ⅱ』に、これまで学んできた必修・選択科目、すなわち専門科目35、基礎科目15、教養科目36を含む86科目がどのように関連していたかを検討した。ここでは、関連有るとした科目の出現率を算出した。すなわち、科目の出現率が高いことはそれらの科目が『総合看護・看護研究Ⅱ』に統合されていると解釈をした。

表2は、『総合看護・看護研究Ⅱ』と関連のあった科目ごとの出現率を年次別に3年間比較したものである。出現率が20%以上の科目に注目してみると、1999年と2001年はどちらも専門科目の6科目のみであるのに比べ、2000年は専門科目が19科目、基礎科目が5科目、計24科目であり出現した科目数は特徴的に多かった。

出現率の高い順に見ると、毎年最も高いものは「看護研究Ⅰ」であり、2001年：58%、1999年：52%、2000年：41%であった。「看護研究Ⅰ」は、研究の基本的な方法と展開を学ぶ科目であり、今回の指標となっている『総合看護・看護研究Ⅱ』を学ぶための基礎的な必修科目であり、出現率が高いことは当然といえば当然である。次に出現率が高かったのは「生活と健康」・「総合実習」・「生涯発達論Ⅰ」・「生涯発達論Ⅱ」であり、各年次とも42～21%であった。「生活と健康」および「生涯発達論Ⅰ」・「生涯発達論Ⅱ」は1～2年生で履修している科目である。その他、専門科目、基礎科目、必修科目に10%以上の出現率が見られ

たことも特徴的であった。

次に実習科目に注目した。カリキュラムでは、実習科目をレベルⅠ「看護援助論Ⅳ」（日常生活援助実習）、レベルⅡ「臨地実習A～G」（小児、成人、老年、地域等の領域実習）、レベルⅢ「総合実習」（学生の関心や興味で、学生が領域を選択する実習）と、段階的に学びが積み上げられるようになっている。どの年次においても実習の最終段階として位置付けられている「総合実習」が高い出現率を示していた。

これらの結果は、『総合看護・看護研究Ⅱ』に専門科目や基礎科目の統合が示されたと解釈できる。しかしながら「家族発達看護論」および「臨地実習B（母性看護）」の出現率が高かった理由の1つに『総合看護・看護研究Ⅱ』を母性看護学・助産で選択した学生が多いという背景も考えられる。今後、『総合看護・看護研究Ⅱ』をどの領域（基礎看護、研究法、小児看護、母性看護・助産学、成人看護、老年看護、地域看護、精神看護、看護管理）で選択しているのかと出現科目とを関係づけていくことの必要性も示唆された。

また、3年間ともに出現率が低かったり出現しなかった科目、言い換えれば『総合看護・看護研究Ⅱ』と直接関連を示さなかった科目は、教養科目群と選択科目であった。これらの科目は看護を学ぶ学生自身の感性や資質に貢献し、物の見方や考え方の理解の幅に重要な科目であり、学生にとってはすべての学びの基盤となっていることを反映しているとも解釈できる。

2. 教科カリキュラムの順序性への評価

学生の希望する科目配置は、入学した年に学びを希望する科目（表3）、最終学年に学びを希望する科目（表4）、3年間の評価を通じ、現在の配置でよいとする科目（表5）に分けて検討した。

入学した年に学びを希望する科目として3年連続出現したのは、「看護援助論Ⅰ」・「看護援助論Ⅱ」・「看護援助論Ⅲ」・「看護援助論Ⅳ」・「ヒューマン・セクシュアリティⅠ」・「生命倫理」の6科目であった。専門科目は早く学び始めたい、基礎科目は専門科目を学び始める前に学んでおきたい

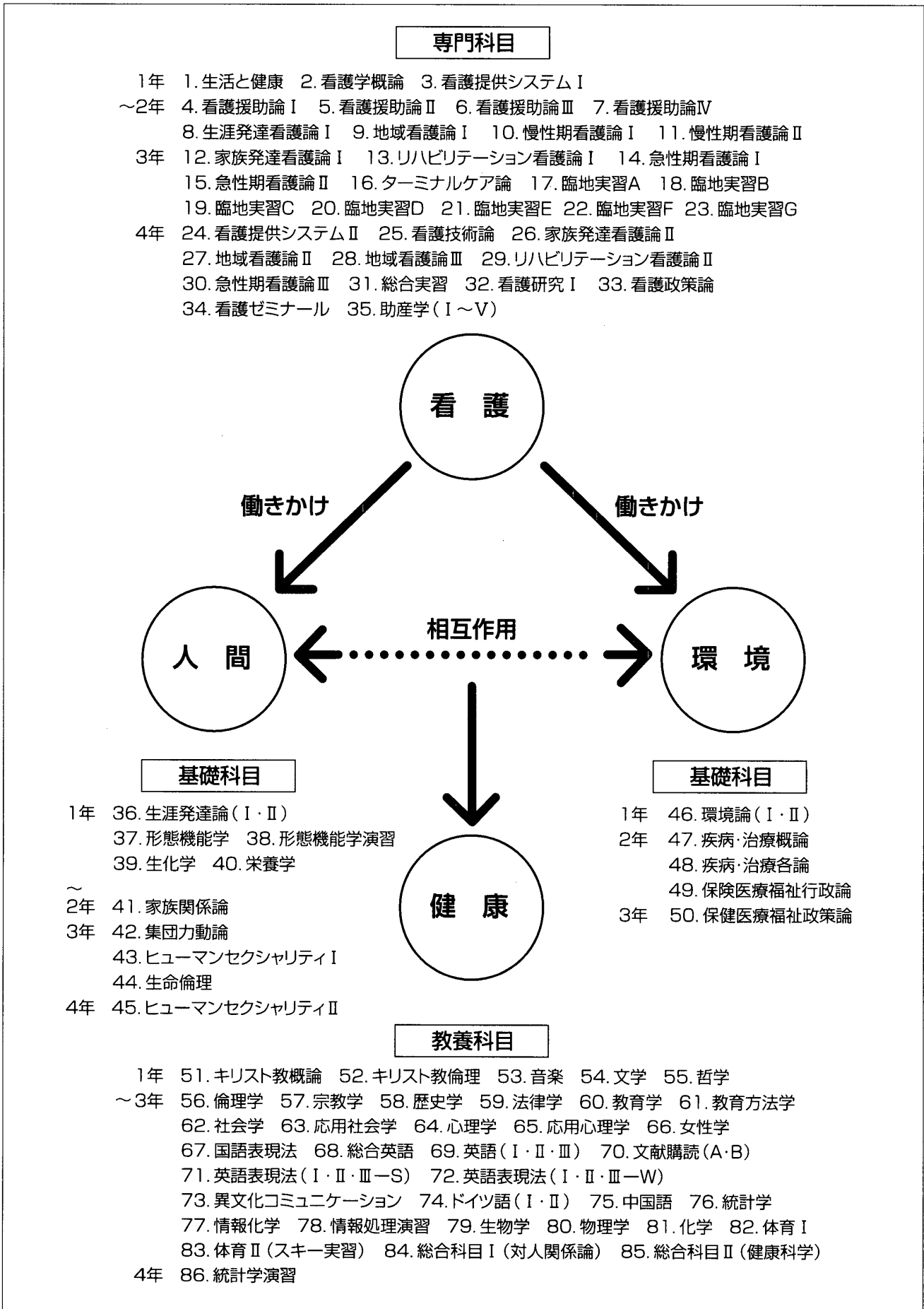


図1 カリキュラムの主要概念と教科目

表2 年次別、「総合看護・看護研究Ⅱ」と関連のあった科目ごとの出現率

%	1999年 n=52	2000年 n=55	2001年 n=63
50~	看護研究Ⅰ	看護研究Ⅰ *総合実習	
40~50		生活と健康 看護学概論	看護研究Ⅰ
30~40	生涯発達看護論Ⅰ 生涯発達論Ⅰ・Ⅱ	*看護援助論Ⅰ *臨地実習B	*総合実習
20~30	生活と健康 *総合実習	*看護援助論Ⅱ *看護援助論Ⅲ	家族発達看護論Ⅰ 生涯発達論Ⅰ・Ⅱ
	統計学	慢性期看護論Ⅰ 生涯発達論Ⅰ・Ⅱ	生活と健康 *臨地実習B
		家族関係論 看護提供システムⅠ	
		看護ゼミナール 形態機能学	
		疾病治療概論 疾病治療各論	
		生涯発達看護論Ⅰ *臨地実習A	
		*臨地実習G 心理学	
		慢性期看護論Ⅱ 家族発達看護論Ⅰ	
		*臨地実習D *臨地実習E	
		生命倫理 統計学演習	
10~20	家族発達看護論Ⅰ *臨地実習B	ターミナルケア論 *臨地実習C	家族関係論 看護援助論Ⅰ
	家族関係論 心理学	*看護援助論Ⅳ 保健医療福祉行政論	*臨地実習F *臨地実習G
	統計学演習 *看護援助論Ⅲ	地域看護論Ⅰ 看護提供システムⅡ	生命倫理 心理学
	*臨地実習D 助産学Ⅰ~Ⅳ	看護技術論 地域看護論Ⅱ	統計学演習 生涯発達看護論Ⅰ
	形態機能学 看護学概論	看護政策論 急性期看護論Ⅰ	ターミナルケア論 *臨地実習C
	*看護援助論Ⅰ 慢性期看護論Ⅰ	急性期看護論Ⅱ *臨地実習F	*臨地実習D *臨地実習E
	*臨地実習A 看護技術論	地域看護論Ⅲ 助産学Ⅰ~Ⅳ	家族発達看護論Ⅱ 看護ゼミナール
	ヒューマンセクシャリティⅠ *臨地実習C	保健医療福祉政策論 形態機能学演習	形態機能学 疾病・治療各論
	*臨地実習E 生命倫理		看護学概論 地域看護論Ⅰ
	哲学 看護提供システムⅠ		*臨地実習A 地域看護論Ⅲ
	*看護援助論Ⅳ リハビリテーション看護論Ⅰ		ヒューマンセクシャリティⅠ 女性学
	地域看護論Ⅱ 形態機能学演習		
	倫理学		
5~10	急性期看護論Ⅰ *臨地実習G	リハビリテーション看護論Ⅰ 家族発達看護論Ⅱ	*看護援助論Ⅱ *看護援助論Ⅲ
	家族発達看護論Ⅱ 集団力動論	栄養学 集団力動論	*看護援助論Ⅳ 慢性期看護論Ⅰ
	総合科目Ⅰ *看護援助論Ⅱ	ヒューマンセクシャリティⅠ リハビリテーション看護論Ⅱ	リハビリテーション看護論Ⅰ 助産学Ⅰ~Ⅳ
	*臨地実習F 看護提供システムⅡ	生化学 哲学	地域看護論Ⅱ 栄養学
	栄養学 ヒューマンセクシャリティⅡ	倫理学 統計学	ヒューマンセクシャリティⅡ 保健医療福祉政策論
	疾病・治療各論 女性学	急性期看護論Ⅲ 宗教学	看護提供システムⅠ 慢性期看護論Ⅱ
	地域看護論Ⅰ 地域看護論Ⅲ	教育学 社会学	疾病・治療概論 応用心理学
	看護政策論 看護ゼミナール	応用心理学 総合科目Ⅰ	
	疾病・治療概論 教育方法学		
	社会学		
~5	慢性期看護論Ⅱ他	ヒューマンセクシャリティⅡ他	急性期看護論Ⅱ他

■は必修科目を，*は実習科目を表している。

という意向の表れといえるだろう。改訂カリキュラムは、看護への高い志向をもつ学生に、あえて1年次では、教養科目に力を入れるように科目を配置した。しかし学生のニーズは、看護学の科目を入学次から求めているといえる。今後とも、入学年次に教養科目と看護学科目をどのように配置していくかが論議する課題のひとつである。

最終学年に学びを希望する科目として3年連続出現したのは、「看護提供システムⅠ」・「環境論Ⅰ」・「環境論Ⅱ」・「疾病・治療概論」・「疾病・治療各論」・「保健医療福祉行政論」・「保健医療福祉政策論」・「統計学」の8科目であった。これには、①2年ないし3年間の学習の積み重ねの後に学ぶ方が効果的な科目であるとする考え方と、②教授

表3 入学した年に学びを希望する科目

科目名	1999年 n=52	2000年 n=55	2001年 n=63	今の 年次
看護援助論Ⅰ	7	2	4	1~2
看護援助論Ⅱ	7	4	4	1~2
看護援助論Ⅲ	9	3	5	1~2
看護援助論Ⅳ*	1	1	4	1~2
ヒューマンセクシャリティⅠ	1	1	3	3
生命倫理	1	1	5	3
生活と健康		4	1	1~2
形態機能学		4	1	1~2
形態機能学演習		1	1	1~2
看護研究Ⅰ	1	1		4
情報処理演習	1	2		1~3
生涯発達看護論Ⅰ	1		1	3
家族関係論	1		1	1~2
疾病・治療概論	1		4	1~2
疾病・治療各論	1		2	1~2
看護学概論		2		1~2
看護提供システムⅠ		1		1~2
ターミナルケア論	1			3
総件数	33	26	36	

表4 最終学年で学びを希望する科目

科目名	1999年 n=52	2000年 n=55	2001年 n=63	今の 年次
看護提供システムⅠ	5	4	4	1~2
環境論Ⅰ・Ⅱ	1	7	1	1~2
疾病・治療概論	1	2	1	1~2
疾病・治療各論	1	1	1	1~2
保健医療福祉行政論	2	3	2	1~2
保健医療福祉政策論	1	2	1	3
統計学	8	5	1	1~3
情報処理演習		1	1	1~3
看護政策論		4	2	4
生活と健康	1	1		1~2
地域看護論Ⅰ	1	1		1~2
ヒューマンセクシャリティⅠ	2	1		3
集団力動論	1		1	3
看護学概論			2	1~2
看護援助論Ⅰ			1	1~2
看護援助論Ⅱ			1	1~2
看護援助論Ⅲ			1	1~2
ターミナルケア論			1	3
総合実習*		1		4
看護研究Ⅰ		1		4
生涯発達論Ⅰ・Ⅱ	1			1~2
形態機能学	1			1~2
家族関係論	1			1~2
総件数	27	34	21	

表5 3年間現在の配置でよいとする科目

専門科目	慢性期看護論Ⅰ・Ⅱ
	家族発達看護論Ⅰ
	リハビリテーション看護論Ⅰ
	急性期看護論Ⅰ・Ⅱ
	臨地実習A~G*
地域看護論Ⅱ	
助産に関する専門科目	助産学Ⅰ~Ⅳ
基礎科目	栄養学
教養科目	キリスト教概論
	英語Ⅰ・Ⅱ
	英語表現法Ⅰ~Ⅱ-S
	英語表現法Ⅰ~Ⅱ-W
	総合科目Ⅰ

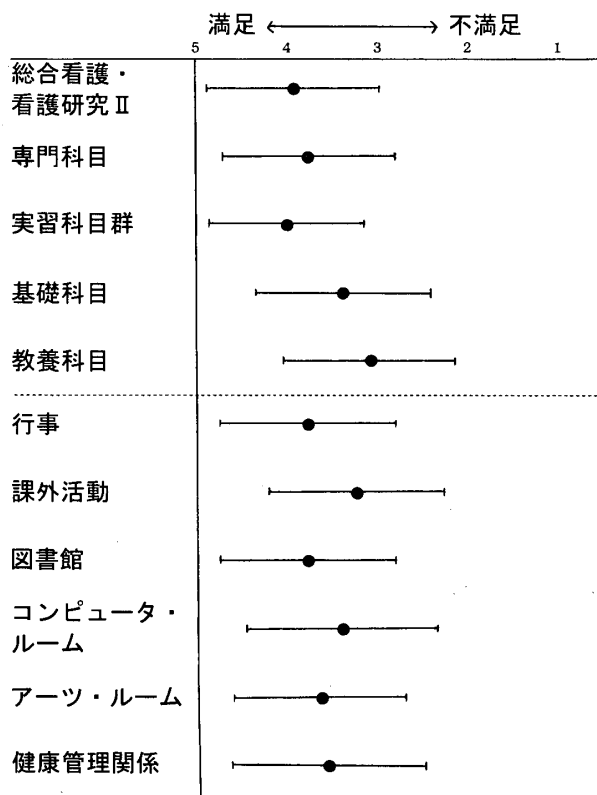


図2 1999~2001年におけるカリキュラム満足度-3年間の平均値と標準偏差

内容が難しく理解しにくい、あるいは理解を促すための教授方法を工夫する余地があるなど、その学年の能力に見合った提供に困難性があるとする見方が示唆される。

3. カリキュラムへの満足度

カリキュラムへの満足度は、満足から不満足の5段階尺度で求めた回答を得点化し、各項目ごと

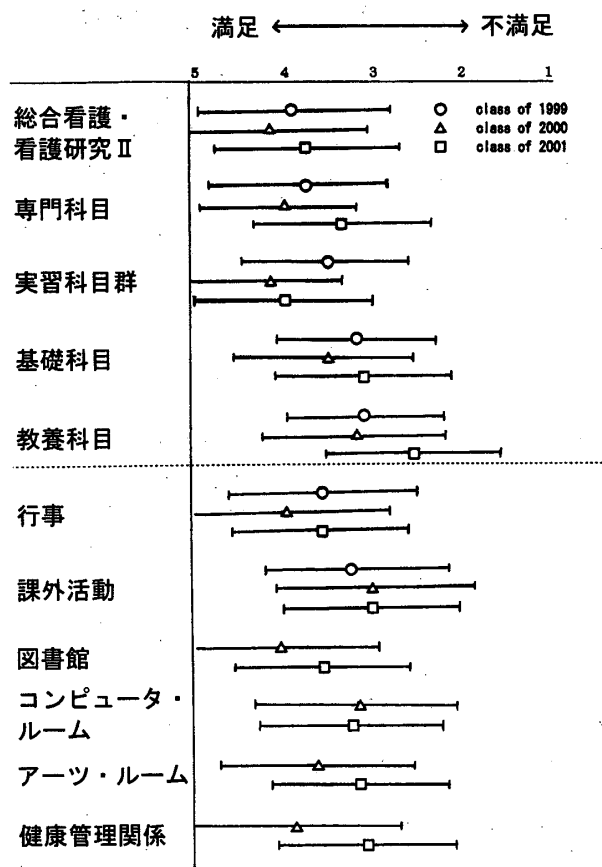


図3 カリキュラム満足度—各年の平均値と標準偏差

に平均値と標準偏差を求めた(図2, 3)。

1999年~2001年の3年間全体の平均値(図2)は、満足度4(やや満足)から3(どちらでもない)の間に分布していた。詳細に見ると教科目では、「総合看護・看護研究Ⅱ」・「専門科目」・「実習科目群」の方が「基礎科目」・「教養科目」よりやや満足度が高い傾向にあった。また、その他の項目では、「行事」・「図書館」・「アーツルーム」・「健康管理室」に比べ「課外活動」・「コンピュータールーム」に対する満足度がやや低かった。

各年次別に平均値(図3)を比較検討すると、教科目は、1999年と2000年に比べて、2001年卒業生は全体的に満足度が低い傾向であった。その他の項目に関しても、2001年卒業生は、1999年・2000年よりも満足度が低かったが、唯一、コンピュータールームに関してはわずかながら満足度が高くなっていた。

4. カリキュラム運用に関する評価

1) 授業や教育システムに対する評価

授業や教育システムに対する評価項目は、1997年のベネッセ文教総研から10項目を選択した。各項目は、学生が「とても当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5段階で回答した。図4は、1999年から2001年の3年間の評価結果である。

そして、これらの結果から、3年間を通して各項目について肯定的と否定的評価のどちらの傾向にあるかを見るため、「どちらとも言えない」と回答したものを除き、「とても当てはまる」と「まあまあ当てはまる」を併せて『当てはまる』(肯定的評価)にし、また、「全く当てはまらない」と「余り当てはまらない」を併せて『当てはまらない』(否定的評価)とし、3年間を通して『当てはまる』に回答率が高かったものから順に並べた(表6)。「当てはまる」で最も回答率が高かった項目は、「専門的な知識が身につく」、次いで、「自分の視野を広げるのに役立つ授業科目がある」「教材がよく研究されている授業が多い」「わかりやすい授業が多い」「シラバスと実際の授業内容はよく連動している」が続いた。これらの項目を、ベネッセ文教総研の女子全体と比較すると、「とても当てはまる」「まあまあ当てはまる」(『当てはまる』)において「専門的な知識が身につく」「自分の視野を広げるのに役立つ授業科目がある」は、本学と類似の結果であったが、「教材がよく研究されている授業が多い」は、ベネッセ文教総研では「まったく当てはまらない」「あまり当てはまらない」(『当てはまらない』)においてでは上位であり、本学とは異なる結果であった。本学では、『当てはまる』の上位に含まれている項目は、本学が力を入れている部分を支持されたといえよう。

また、「しっかり勉強しないと単位の取得が難しい授業が多い」「選択できる授業科目が豊富に用意されている」「語学教育が充実している」は、『当てはまる』と『当てはまらない』の回答率の間で、3年間を通して30%以下の差で大きな偏りが見られなかった。しかし、「選択できる授業科目が豊富に用意されている」が僅かではあるが、『当てはまらない』で増加しているのが見られた。本学では、授業科目として、昨年度より専門分野

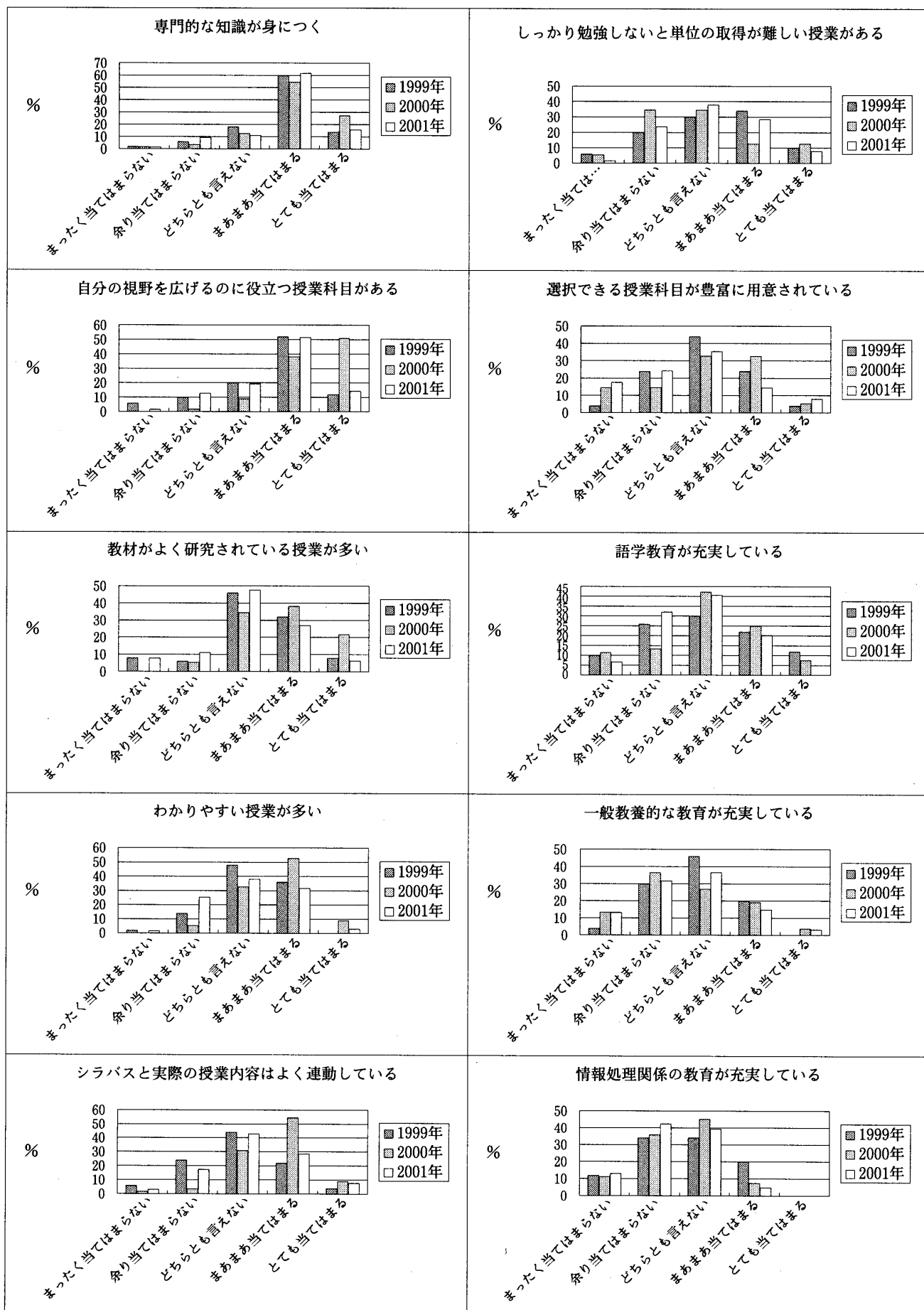


図4 学生から見た授業・教育システム評価の推移－1999～2001年－

表6 学生から見た授業・教育システムの評価
 -1999~2001年の肯定的・否定的評価の比較-

項目	年度 (*単位は%)		
	1999年	2000年	2001年
専門的な知識が身につく			
当てはまる	74.0	81.9	77.8
当てはまらない	8.0	5.4	11.1
自分の視野を広げるのに役立つ授業科目がある			
当てはまる	64.0	89.1	66.1
当てはまらない	16.0	1.8	14.5
教材がよく研究されている			
当てはまる	40.0	60.0	33.3
当てはまらない	14.0	5.5	19.0
わかりやすい授業が多い			
当てはまる	36.0	61.8	34.9
当てはまらない	16.0	5.5	27.0
シラバスと実際の授業内容はよく連動している			
当てはまる	26.0	63.7	36.5
当てはまらない	30.0	5.4	20.7
しっかり勉強しないと単位の取得が難しい授業がある			
当てはまる	44.0	25.4	36.5
当てはまらない	26.0	40.1	25.4
選択できる授業科目が豊富に用意されている			
当てはまる	28.0	38.1	22.6
当てはまらない	28.0	29.2	41.9
語学教育が充実している			
当てはまる	34.0	32.7	20.3
当てはまらない	36.0	25.0	39.0
一般教育的な教育が充実している			
当てはまる	20.0	23.1	18.3
当てはまらない	34.0	50.0	45.0
情報処理関係の教育が充実している			
当てはまる	20.0	7.6	4.9
当てはまらない	46.0	47.2	55.7

での選択科目を増やしたり、新たに看護ゼミナールを開講しているが、思うような改善の評価が得られなかった。学生は教養科目に選択できる豊富な授業科目を望んでいるとも解釈できる。

一方、『当てはまらない』の視点で見ると、「情報処理関係の教育が充実している」が最も回答率が高く、次いで「一般教養的な教育が充実している」であった。特に、情報処理関係に着目してみると、『当てはまらない』が年毎に徐々に増加しているのがわかる。本学は私立大学であることから、最近の加速的に変化する情報技術革命に即した設備投資の困難性があるが、何らかの改善が今後必要であると思われる。

2) 教育支援に関する評価

第1回調査において、カリキュラム運用に関する具体的な内容を自由記述で求めた。しかし、自由記述は書きたい人が書くという傾向があり、より一般化する内容にすることが一つの問題であった。丁度、1999年7月に学内教員研修で「カリキュラム評価セミナー」が開かれ、講師の大学（米国 Fairfield 大学）で使用されている学生の満足度質問紙を紹介された。その中から9項目を本学版に修正し、2000年と2001年に用いた。各設問は、4:「強くそう思う」から1:「強くそう思わない」の4段階尺度で回答を求めた。表7は、「強くそう思う」と「そう思う」を、肯定的回答率とした。両年とも「本学の学生として経験したことは肯定的にとらえている」が9割以上と高率であった。肯

定率が7割以上は、2000年が7項目、2001年3項目と年次による差がみられた。興味深いことに「コンピュータールームの故障への対応の充分さ」は、2000年38.2%が、2001年60.4%と上昇していたが、この背景には大学側の対応策の実施と符合するものであった。このことは、実効あるカリキュラムには、具体的な質問項目が改善に有用な評価として機能することが示唆された。

V. おわりに

改訂カリキュラム導入期の3年間における卒業時点での学生側から見たカリキュラムの満足度と

表7 学生からみた教育支援肯定的回答率

項 目	2000年 n = 55	2001年 n = 63
全体的に見て、本学の学生として経験したことは、肯定的にとらえている	100.0	90.5
図書館の成書（本）や雑誌は最新・広範囲であり私の学びをサポートしている	87.3	84.1
学生は、カリキュラムに対して評価する機会が与えられている	92.8	66.1
教職員は、学生の関心事に耳を傾け、近づきやすい存在である	92.8	63.9
教育方針は、明確に述べられ、公表されている	78.2	73.0
学習を支援するための OHP/OHC の使用やビデオ教材は充分である	78.2	65.1
自己学習室・アールームは利用しやすい仕組みになっている	75.9	58.7
コンピュータールームの故障に対する対応は、充分である	38.2	60.4
学生部によるサポート（個別指導、進路相談など）は、利用可能で役立つ	58.2	22.2

教科カリキュラムの順序性、統合性に対する評価の推移を知るために同一質問紙を用いて調査を行った。

その結果、①統合性については、『総合看護・看護研究Ⅱ』（いわゆる卒業論文）に3年間とも基礎科目と専門科目の科目が関連していることが示され教科カリキュラムの統合性が支持されていること、②順序性は、3年間とも学生が入学次から看護学の科目を求め、入学年次に教養科目と看護学の科目をどのように配置するのかが課題として示されたこと、そして、③カリキュラムに対しては、3年間ともその高い順に「総合看護・看護研究Ⅱ」、「専門科目群」、「実習科目群」が、満足度5段階の4：「やや満足」から3：「どちらでもない」の間に分布し、カリキュラム運用に関しては、「専門的知識が身につく」「自分の視野を広げるのに役立つ授業が多い」等が3年間ともに肯定的回答が高く、また、本学の学生として経験したことを肯定的にとらえている学生が9割以上をしめ総じて満足していることが示された。しかし、情報処理関係の充実への取り組みが急務な課題として示された。

今後とも、より実効あるカリキュラムに向けて

このような評価活動の重要性が再認識された。

文 献

- 1) 菱沼典子, 小山真理子, 小島操子, 常葉恵子, 香春知永, 宮坂義彦, 助川尚子, 木村登喜子, 伊藤和弘, 菊田文夫, 岩井郁子, 小松浩子, 堀内成子, 及川郁子, 中山洋子, 飯田澄美子, 荒井蝶子, 羽山由美子, 太田喜久子, 野地有子. 聖路加看護大学1995年改訂カリキュラムについて. 聖路加看護大学紀要22. 1996, 113-121p.
- 2) 小山真理子, 木村登喜子, 香春知永, 平林優子, 南川雅子. カリキュラム評価システムについての答申. 聖路加看護大学, 2001.
- 3) カリキュラム評価第3ワーキンググループ. 卒業時の学生によるカリキュラム評価. 聖路加看護大学紀要26. 2000, 133-143p.
- 4) ベネッセ文教総研. 大学満足度と大学教育の問題点. 1997全国国公立大学191校調査報告書.
- 5) Fairfield 大学「Student Satisfaction Tool」. Valiga 先生「カリキュラム評価」セミナー 聖路加看護大学教員研修. 1999.7.